

秋田市出身の映画監督・佐藤快磨<sup>たくま</sup>さんが、男鹿のナマハゲを題材にした映画『泣く子はいねえが』を制作し、11月20日から全国公開されます。公開に先立ち9月にスペインで行われたサン・セバスティアン国際映画祭では、最優秀撮影賞に輝き世界の注目を浴びました。

今年1月から3月にかけて市内各地で撮影が行われ、多くの市民がエキストラなどで出演している今作品。佐藤監督に男鹿を舞台に選んだ経緯や撮影への想い、見どころなどをお聞きしました。佐藤監督がナマハゲを通して描きたかった、父親になることとは？ ぜひ、劇場でご覧ください。



サン・セバスティアン国際映画祭 最優秀撮影賞受賞

# 映画『泣く子はいねえが』

佐藤快磨<sup>たくま</sup>監督 独占インタビュー

男鹿を舞台に選んだ理由を教えてください！

自分の商業デビュー作は「生まれ育った秋田を舞台に映画を撮りたい」という思いがありました。私の強烈な印象のなかに、自分が幼いころ男鹿のナマハゲを友人宅で体験したものがあります。その場に、当然自分の父親はいませんので、すごく恐ろしい気持ちと親にすがれない心細い気持ちが記憶に残っています。ナマハゲには、父親に守られたり、子どもを守ったりして、親子を形づくる側面もあるのだと思います。それとは別に、自分は父親ではないのですが、友人たちが結婚し子供が生まれて父親になっていく中で、「自分も当たり前のよう父親になれる」と思っていました。しかし、父親になる未来がどんどん遠ざかり、「自分は父親になれるのだろうか」という不安を感じ始めたことが、この映画の出発点でもあります。父親ではない自分が、父親になるタイミングや父親になるきっかけを映画で探すことができなにかという思いがありました。そうした両方の側面から自分の撮りたかった映画とリンクした気がしました。

そこから最初に、この映画のラストシーンを着想しました。そして、まずは男鹿に行って取材をさせていたどころ、ナマハゲのことを勉強しようとする具体的に動き始めたのが約5年前です。

